発見！熊野町のエエところ。

シリーズ第17回

全国各地にある名所や名物、もちろん熊野町にもたくさんあります。そんな町内に埋もれた、さまざまなモノ・場所などの「エエところ」を紹介するコーナーです。

「土岐城の三角点」～vol.1 シリーズ石造物～

みなさん、熊野町のあちこちで、石造を見かけたことはありませんか？石造といえば、石仏から石灯篭、石碑に石橋、石造美術のオブジェやモニュメントなどなど。これ、なんだろ～？と首をかしげるものから、見るからにその物体の正体を判断できるものまで。シリーズ最初は、土岐城（418・6m）の頂上にある石造物、「三角点」。通りすがりになにげに見ている石造を再発見～！

案内板

萩原地区、土岐城団地の最上部に登山口の「案内板」が見える。中世にはその名のとおり、本丸をもつお城だったそうである。当時の敷石の階段がいくつも残っている登山道を20分ほど登り、息も上がってくるころになると、急に前方の視界が明るくなってくる。

頂上少し手前に「土岐神社」が祭ってあり、まずここでお参りをする。見れば、辺りの下草は綺麗に刈り取られ、箒で清掃してくださった跡が残っている。ありがたい。こんなに高い山のてっぺんなのに、どなたかお世話をしてくださっているようである。

山頂からの眺めはまさに360度！熊野町全体が見渡せる雄大な景色である。山頂は城跡の石が散在した、こんもりとした小高い丘のようである。

山頂からの眺め

これが本丸であろうか、周囲には桜の木が植樹されている。その丘の中心にデン！と、大きな四角い石、「三角点」を発見！

「三角点」とは、位置と高さを求める「三角測量」の際に、緯度・経度・標高の基準となる点。三角形の角の大きさと、辺の長さの関係を用いる三角法によって位置関係を求めるので、通常は視界を確保するため、見晴らしよい山頂に設置されている。三角点は、その測量方法から技術的に1等から4等まで区分されて存在する。決して、山自体の等級を示すものではない。土岐城の三角点は、4㎞毎に設置される「三等三角点」である。よく見れば、一辺が15㎝の花崗岩でできたこの石造、下のほうがひとまわり太くなっており、「三角点」と刻まれた側面が、南を向くように埋没されているようである。

三角点の石造

地理に詳しい方にお話を伺ってみた。当時の陸軍の力は絶大なもので、明治時代、陸軍の陸地測量部が膨大な資金と時間をかけて作り上げた事業が、三角点での三角測量方法による地形図で、当時の5万分の1の地図の元になったそうである。その作業は、三角点のある高い山頂で天候障害と格闘しながら、ひと月以上もかかって観測を繰り返すこともあるそうで、なんとも地味で苦労の多い事業である。冬の寒い時期には、「サージ」という大きな一枚の布を頭から被って、山頂での測量作業をして、お昼になると、今度はその「サージ」を下に敷いてご飯を食べていたそうだと。なるほど、その「サージ」、よほど暖かいのであろうか、使い勝手が良さそうな布だ。当時の大変な手作業を想像できる貴重なお話である。

戦後、この作業は国土地理院が引き継いでいる。現在は、GPS人工衛星を利用したGPS測量方法が主流となり、より精度の高い測量が可能となったといわれている。

ふむふむ、100年ほど前に設置されたこの四角い石造物が、地形図作成の基礎となったのだな。三角点の役割は偉大だなぁ～と、寒空の下でしみじみと眺める。そして、「サージ」の変わりにマフラーを頭から被ってみた。ご苦労さまと、三角点をなでながら。

取材　伊藤真由美